

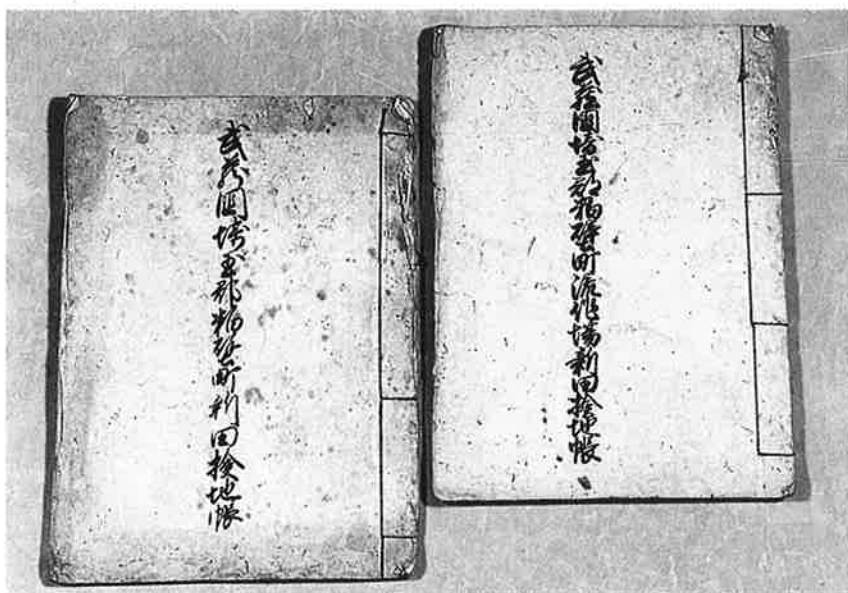
# かすかべの宝ものⅡ 展示案内

～江戸時代の暮らしと文化～

平成12年3月18日(土)～6月25日(日)

## 1 宿や村の古文書・記録

江戸時代の宿や村は、おおよそ今日の大字にあたります。江戸や城下町に住む領主は、主に文書を通じて宿や村の人々を支配していました。このため、宿や村では多くの文書や書類が作成されました。



### 2 粕壁町(宿)の新田検地帳(井上恒正氏寄贈)

延享4年(1747)「武蔵国埼玉郡粕壁町流作場新田検地帳」(右)と明和9年(1772)「武蔵国埼玉郡粕壁町新田検地帳」(左)。元禄10年以降の粕壁宿の新田開発地を検地したもの。このほか明和3年(1766)のものもある。

### 3 延享の新田検地帳に

見える神尾若狭守  
検地奉行であった神尾若狭守春央は当時の勘定奉行で、苛烈な年貢増徴を進めたことで有名。



### 1 元禄10年(1697)「武蔵国埼玉郡粕壁町検地水帳」(井上恒正氏寄贈)

検地は土地(田・畑・屋敷など)の丈量調査のこと。そこで打ち出された面積と地目・等級から収穫量を石高に換算した。



### 4 嘉永4年(1851)

「谷原濫觴記」  
(神田好永氏寄託)

西谷原新田の名主が作成した、板に刻まれた同新田の由緒記。寛文9年(1669)江戸町人の資本により開発された旨を記す。



### 5 谷原濫觴記 表(右)と裏(左)



6 天保14年(1843)「仕用帳」(右)と天保15年「鎮守再建寄附仕様帳」(左)(石塚保久氏寄贈)  
新方袋・中曽根両村の鎮守香取社の工事書類。  
支配に関わる書類だけではなく、村の事柄についてもさまざまな書類が作成された。

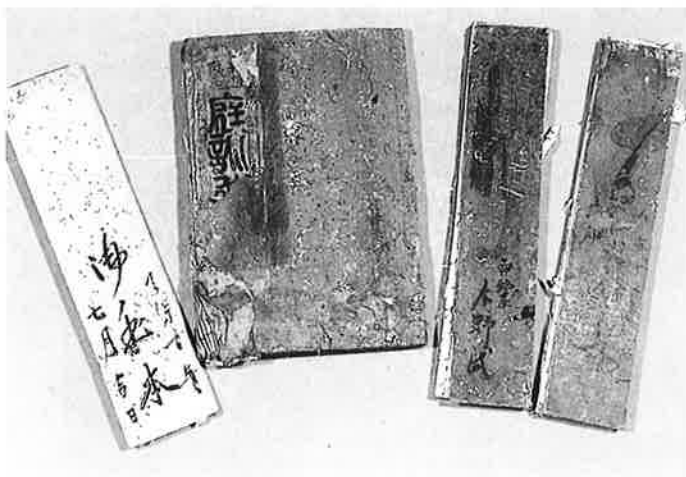
## 2 広がる交流

日光道中や岩付道・関宿道などが通る粕壁宿は、交通や流通の拠点でした。近くの農村や城下・宿場・河岸などの町場との間で、商いなどを通じた交流が盛んだったと思われます。また、江戸周辺に位置し交通の便もよかった市域の宿・村は、江戸文化の影響を受けやすく、江戸時代の後半には、俳諧などの文芸が流行しました。

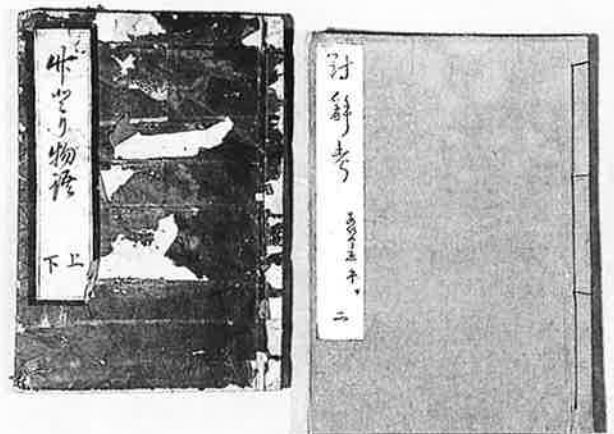
路のかたわらや、お寺、神社の境内にひっそりと建つ、石で造られた道しるべや句碑・歌碑・記念碑などは、そうした交流のあとを今に伝えるものです。



7 弘化4年(1847)～明治初期(祝儀・不祝儀見舞帳)(佐野克之氏寄贈)  
粕壁宿商家伊勢屋に伝えられた帳簿。写真は火事見舞いの部分で、越谷(「こしがや」)、岩槻(「いわ付」)など城下・宿場の地名が見え、交流がうかがえる。



8 伊勢屋の手習書(佐野克之氏寄贈)  
天保14・15年(1843・1844)「商売往来」(右)、文政10年(1827)板「庭訓往来」(中央)、天保10年(1839)「御手本」(左)。商家の子供の教育、手習いに使われたと思われる。



9 「竹とり物語」(左)と安政7年(1860)板 上田秋成翁撰「冠辞考」(右)(佐藤雅子氏寄贈)  
江戸時代後期には、読み物や文例集などが広く一般に普及した。



10 伝増田眠牛笈(山中観音堂寄託)

増田眠牛は、江戸後期の俳諧師。この笈を背負って粕壁宿の商家に寄宿し、明和8年(1771)没した。



11 山中観音堂 復元模型

増田眠牛が暮らした跡と伝える山中観音堂。春日部駅東口ロータリー先の交差点付近にあった移築前の山中観音堂の姿。



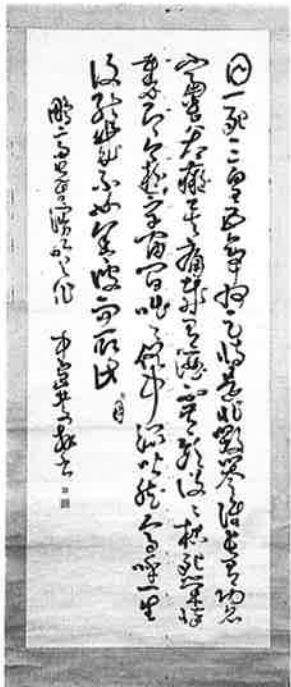
12 寛政11年(1799)葛飾蕉門の句集(右)と文化元年(1804)「かつしか俳諧 十葉抄」(左)(石井功時氏寄贈)

葛飾蕉門は、江戸後期に埼玉東部で流行した俳諧の一派。備後の石井文龍は有力門人で、起竹庵、宜春園とも号し、新方連の会頭をつとめた。



13 「自家 仮名文詠草」と寛政4年(1792)「ちりとり」(石井功時氏寄贈)

「自家 仮名詠草」(右)は文龍の和文集。「ちりとり」(左)には「立敬 祖々父 文龍先生之遺墨」とある。



15 中島撫山書(大垣達也氏寄贈)

中島撫山(通称は慶)は、漢学者亀田鵬斎の子綾瀬の門人で、幕末の一時期大場村名主家に滞在していた。撫山は、私塾「幸魂教舎」(現久喜市)を明治6年(1873)設立した。



14 大場村名主が使った文机(大垣達也氏寄贈)

裏面に石井文龍の文と句があり、大場村名主と交際があった。

### 3 暮らしを支えて

日常使われている身近な道具は、私たちの仕事や生活に関わりが深いのに、なかなか残りにくいものです。鑑賞を目的として、記録を目的とするものとは違って、使用済みになると価値がなくなるからでしょう。しかし、実はそうしたものがこそ、私たちの暮らしを本当に支えていたものでもあります。今回紹介する数点の民具は、たまたま墨で年号が書かれていたことから、江戸時代に作られ、使われていたことがわかるものです。



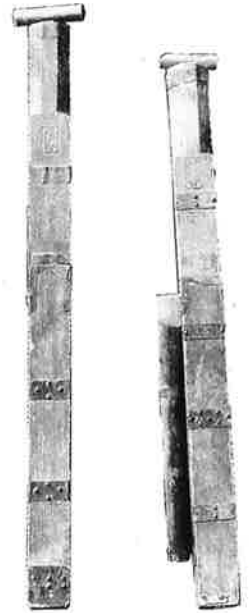
16 文久2年(1862)行灯(山口喜重氏寄託)

中に油皿を置いて室内をともし道具。幕末期粕壁宿の商家に伝わったもの。



17 行灯を収納した箱とそのふた(山口喜重氏寄託)

「文久二年戌歳九月吉日 鹿間氏」とある。



18 天保4年(左・1833)と慶応元年(右・1865)

の竜吐水(小暮昌新氏・伊藤慎一氏寄贈)

竜吐水は火消し用の手押しポンプ。



21 安政4年(1857)ぬかどおし(鈴木弥一郎氏寄贈)

篩の一種で、精米と糠を分けるのに利用した。



19 天保4年竜吐水の焼き印

製造者による焼き印。「請合」は製品保証の意。「御免、日本橋左内町、吉村藤四郎」は官許を得て製造している製造者。



20 慶応元年竜吐水の墨書

上段に「何方江まゝり候ても、御返し被下」、下段に「慶応元丑十月[ ]、内牧村あら九、喜右衛門」と記す。



22 ぬかどおしの墨書

背面に「安政四丁巳年霜月吉日 鈴木氏」とある。

寄贈者・寄託者(図録掲載者のみ・敬称略)

ありがとうございました。

井上恒正 神田好永 石塚保久 佐野克之  
佐藤雅子 山中観音堂 石井盾夫 大垣達也  
山口喜重 小暮昌新 伊藤慎一 鈴木弥一郎